

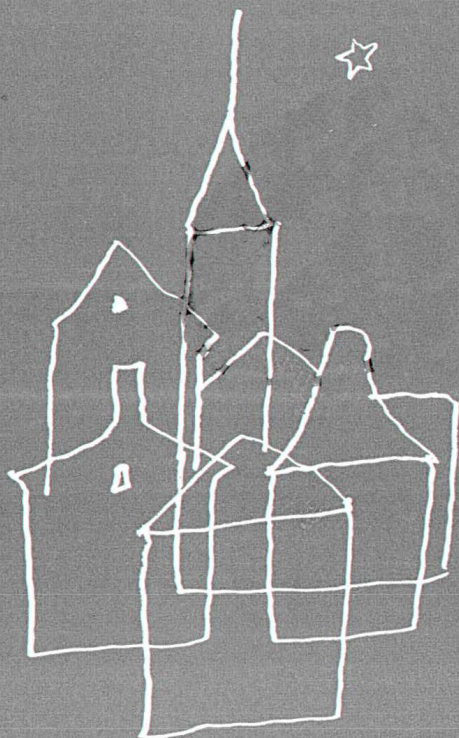
遠藤和子著

星になったおばあちゃん



星になったおばあちゃん

遠藤和子著



あすなろ書房

星になったおばあちゃん



星になったおばあちゃん

1971年3月20日 印刷

1971年4月1日 発行

定価 680円

著者 遠藤和子

発行者 山浦常克

印刷者 坂本修三

発行所 株式会社 あすなろ書房

東京都千代田区五番町 10-6

電話 261 0346 振替東京 63084

東洋経済印刷・越後堂製本

著者紹介

遠藤和子 (えんどう・かずこ)

1925年富山県に生まれる。

富山師範学校を卒業。教員として現在に至る。そのかわら、児童劇作家・斎田喬氏に師事し、児童劇作、童話創作活動を行なう。日本児童演劇協会会員。富山県児童文化研究会員。著書——『あしたの歌』『おとなって、みんな悩んでいるのね』

落丁・乱丁本はおとりかえします。

はじめに

去年の夏、東京に出かけたわたしは、春からの念願がかない、ふたりの教え子に会いました。ひとりとは悟さとる、もうひとりは朋子ともこです。悟とは二年近く、朋子とは一年ぶりの再会で、心と心が触れあった仲だけに、会わない歳月に、どのように成長しているかを楽しみにしていきました。そして、ふたりの頼もしい成長ぶりを見たことは、大きな喜びでした。

わたしが、特殊学級の担任として受け持ったとき、それぞれ小学校四年生であつたふたりは、もう中学三年生になっています。担任であつたのはわずか二年間、ふたりが六年生になつた春、わたしは、いま勤めている東部小学校に転勤しましたが、それぞれ家のつごうで、東京にいくまでは、家族ぐるみの交際をつづけていました。とくに、朋子とは、離れてからも一年半、書くことを通して深くつながり合っていました。

悟の家を訪れると、わたしの背だけほどに成長した悟は、つぎつぎと帳面をひろげて見せ、からだだけでなく、心も成長したことを知らせてくれました。

つぎに、朋子の家を訪れました。新宿駅から地下鉄に乗って、方南町の駅に着いたとき、朋子

が迎えに出ていました。

わたしは学校の勤めを終えてから、朋子の家にかよった一年半。雨の日も雪の日も、夕暮れのバス停で、わたしを待っていたように……。あいかわらず、ひよろ長いからだではあるけれど、背だけがぐんと伸び、驚いたことには、顔じゆうにブツブツ出ていたしっしんがあとかたもなく、つるつるの膚になっていました。

それを見たとき、わたしは思わず、空を見上げました。夏の真昼さなか。「おばあちゃん星」は見えるはずありません。

「おばあちゃん星」わたしと朋子が、書くことを通して歩いた二年半。一日も欠かさず書き通したその間、いつもふたりの上に「おばあちゃん星」が光りつづけていました。

それは、朋子の書くことが、おばあちゃんがなくなった四年生の三学期から始まり、中学一年生の夏まで、空の上で光り輝いている「おばあちゃん星」を対象にして書かれたからです。そして、わたしも、模索しながらの指導の途中、迷ったとき、いつも「おばあちゃん星」に導かれるようにして転換をはかりました。

朋子は、先天性幽門狭窄症ゆうもんきょうさくしょうという十字架を背負って生まれました。幽門狭窄は、医学の力ではありませんが、そのときに服用した薬の副作用で、その後ずっと、しっしんやぜんそくに悩まされつづけていました。そのために、発育ばかりか知能の発達も遅れ、一年間の就学猶予をして、特殊学級に入級したのです。

朋子のおばあちゃんは生きているとき、そんな朋子の命綱となり、死んでからは「おばあちゃん星」として、文章を書かせることによって救いました。

この朋子の書くことの指導を通して、わたしは、数多くのことを教えられました。

まず、教育の姿とは、教師と子どもだけでなく、子どもを取りまく家族もまじり、その三者が、手を取り合って歩むことだということです。

同じ学校にいるときは、帰宅が遅くなったにもかかわらず、家族がよく理解してくれました。また、わたしの転勤によって離れたあとの一年半の指導では、勤めを終わってからくるわたしを、家族の人たちがあたたかく迎えてくれました。また、朋子の指導が終わると、市電に乗るまでの三十分のたんぼ道を、朋子の母が、いつも送ってくれました。虚弱でか細いからだの朋子が、雨風や雪に吹きつけられながら、かさをさしてバス停にわたしを迎えるなら、母親は、長靴をはいて、暗い雪道を送ってくれました。

こうして二年半余り、毎日書きつづけたのですが、朋子がわたしを求め、家族が教師を信頼して、協力を惜しまなかったからこそ、つづけられたことです。小学生なら、テレビの前にベッタリすわっていることの多い昨今、家族がテレビを見ていても、書くことの方に楽しみを見いだしていたことは驚きでした。

つぎは、教育は教えるチャンス、つまり「^{そつた}啐啄の時期」をとらえることがたいせつであり、たゆまぬトレーニングが必要だということです。

わたしが担任したときの朋子の学力は二年生程度、書くことは、したこと、あったことを、羅列的に二、三行ぐらい書くのが精いっぱいだったのです。最初のうちは、書くことをいやがり、放課後に残されることを不満に思っていた朋子が、一年もたたぬうちに、原稿用紙の七、八枚を一気に書きなぐり、童話を創作するようになりました。こうしたことから、わたしは、針の先でつついたような小さな力でも、教えるタイミングをとらえ、トレーニングを積みかさねれば、どれだけでも伸びるものであることを知らされました。そして、わたし自身、朋子を導きながら、自分で自分をしかりつけたり、いろいろの手だてを考えていきました。

つぎには、書くことは、考えを深めさせるだけでなく、性格をも変えていくということです。運動能力が劣り、手先の無器用な朋子は、遊びにしろ、手先を使う勉強にしろ、友だちについていけず、そのために、いつもメソメソした子どもでした。また、そうしたことから、周囲の保護を受け、自分本位なところが多かったのです。それが書くことで自信を持ち、読書とあいまって、思いやり深い性格に変わっていききました。

朋子のどの作品の中にもあふれている優しい思いやり、これは書くことと読書によって育ったのです。

またこの中で、わたしは朋子に童話を創作させています。子どもたちが創作するばあい、たぶんに、名作童話の亜流のようなものか、作文と変わらぬものになります。朋子には、現実の事象をしっかり見つめさせ、そこから思い出をたぐらせたり、想像させたりして書かせました。

この本を、特殊学級の担任教師と子どもとのたたかひの記録としてだけでなく、教育のあるべき姿として、あるいは、作文指導・子どもに童話を創作させる一資料として、数多くの人びとに読んでいただければ、しあわせに存じます。

実名で出すことに協力してくださったばかりでなく、「よいことばかりでなく、悪いことも正直に書いてくださっても結構」とおっしゃった小磯さんご一家。

二年半の指導を通して、朋子と、そのご両親に出会ったことの教師としてのしあわせを、しみじみと感じております。

児童劇作家・斎田喬先生、この本の中に出ておいでになる方がた、あすなろ書房社長・山浦常克氏と、数多くの方がたのお励ましとご協力をたまわりましたことに、心からお礼を申し上げます。

「おばあちゃん星」が、いつまでも朋子の上に光り輝き、朋子をしあわせに導いてくれますことを祈ります。

一九七一年三月

遠藤和子

もくじ

はじめに

第一章 出会い

9

一 こんな目、なくなっちゃえばいい

10

二 はきだされっ子

25

三 おばあちゃんの死

37

四 おばあちゃん星

47

第二章 指導と発展

59

一 おばあちゃん日記

60

二 天国づくり

73

三 天国のおばあちゃんへ

89



四 天国にいききたいなあ

105

五 天国に出かけた朋子

131

六 おばあちゃんとの別れ

159

七 天国物語

191

八 星づくよの道

215

九 ふぶきの日

234

十 別れ

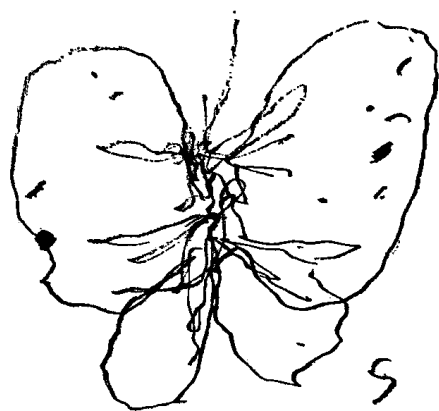
256

第三章 再会

279

そうてい・須田 寿

第一章 出会い



一　こんな目、なくなっちゃえばいい

小磯朋子。この子は、はじめて特殊学級を担当したわたしの前へ、最初に立ち現われた子どもであり、それから三年半、文を書くことの指導を通して、わたしに教育の尊さと楽しさを教えてくれた子どもである。

昭和四十年四月一日。その朝、いつになく早く学校に着いたわたしは、新しく担任することになった教室に向かつて、足を急がせていた。教室は、二つのむねが平行している北側校舎のはずれにあった。

わたしは教室の前に立った。頭上高く張りめぐらされているスリガラスでは見えないが、登校する子どもがまばらであるから、だれもいないだろう。そう思つて戸をあけた。案に相違して、四、五年生ぐらいの男の子と女の子がいた。ふたりは、ひとつの机の上に両ひじをのせ、からだを寄せ合うようにして話し合っていたが、戸の音にさっと振り向き、わたしの姿を見て目をみはった。が、すぐ面はゆそうに目を伏せていった。

「こんにちは」

わたしは笑いながら声をかけた。すると、女の子がふうっと立ち上がったかと思うと、ヒョコヒョコと歩いてきた。足を踏みだすたびに左右の肩を振りたてるひよる長いからだは、ちよつとついても、よろりとするほど頼りなく、しんのないからだのようだった。女の子はわたしの前になると、丸っこい小さな目をしわしわさせながら、ピョコンと頭を下げた。それがいかにも道化て見え、わたしは思わずくりと笑った。

「何て名まえなの？」

—ここにこしながら、なにげなく女の子の手を取ったわたしは、はっとして手を引いた。握った瞬間のカサカサした感触。そのざらついた皮膚が、手を通して、わたしの心にひやりと響いたからである。手だけではない。顔も、とくに首筋の皮膚が白くそそけだっている。オデキのなおりがけにはるかさぶた。その細かいのが一面にひろがっているのだった。わたしの心が、ツーンとしてきた。この学級の担任を、軽卒に引き受けたのではないかという悔いが、みるみる心の中にひろがっていった。

「小磯朋子！」

「先生、小磯朋子というがだぜ。ぼくは川上悟なが」

女の子の返事に何の反応も示さないで、聞こえなかったと思つてか、席にいる男の子が自己紹介をかね、大きな声で呼びかけた。

「ああ、小磯さんに川上さんね」

わたしは、あらためてふたりの顔を見やった。

これが、わたしと朋子との出会いである。

春休みも終わり近い日、家にいると、学校から呼びだしの電話がかかった。教員異動も終わり、引きつづき、同じ学校に勤めることになったやさきのことである。

堀川小学校。それが、わたしの勤めている学校であった。市の中心街から二キロ南の地点にあり、富山駅から、学校のすぐ南、市電の終着所である南富山に向かって、ひっきりなしに電車が走っていた。学校は、その市電の道から少しはいり込んだところにあり、道をはさんで真向かいに女子高校、その隣に中学校の校舎が建ち並んでいた。学級数は三十一、児童数・千四百名の市内でも大きな学校の一つであった。

担任の異動ならば、三十一日の出勤日に知らされるし、担任していた子どもたちの事故が起これば、電話口で連絡されるだろうにと、思いあたるふしがないままに出かけた。

学校に着くと、すぐ校長室に呼ばれ、学校長から特殊学級担任の話が持ちだされた。「特殊学級」とつさに、担任していた学級と廊下続きのスリガラス張りの一角が浮かんできた。どんな子どもがいたかと思いだそうとしたが、カゲロウの中に女の子がふたりほど浮かび、すぐ消えた。あとで考えると、マキ子と加代子を覚えていたとみえる。それほど、わたしの意識の外にあった。ス

リガラスの窓が中を見せなかったこともあるが、研究に明け暮れる毎日が、そこに心を寄せるひまを与えなかったからである。

演劇活動に関心が深いようであるから、そのほうで、ちえ遅れの子どもたちを育てては、というのが、学校長の考えであった。「演劇」「特殊学級」「八人」この三つが、頭の中でぐるぐる回っていた。黙っているわたしの横で、教頭先生が引き受けるようにと、しきりにすすめた。四十人ばかりの普通学級からみれば八人という数は、いつも子どもたちが目の中にはいて、接触の度合いも多いから扱いやすい。ちえ遅れの子どもたちの学習は、個別指導をすればよい。けっきょく、教職経験二十年。ともかくも人並みに過ぎてきたという自覚と、八人という人数が、未知の世界に一抹の不安を感じながらも足を踏み込ませることになった。

ところが、日がたつにつれ、教えることがいかにたいへんであるかを思い知らされるばかりであった。

まず、学年の違う子どもたちの集まりである。六年生のマキ子をかしらにして、四年生の悟・クニ子・シゲ子・加代子、そして朋子の五人。それに二年生の公子。もうひとり、四年生には肢体不自由の高広がいるが、当分施設に入園していることになっていたから、八人とはいっても、実質は七人であった。だからといって、たいへんであることには変わりがなかった。

そのうえ、ひとりひとりの学力が違う。

二年生の公子は音感がよく、新しい曲をオルガンとハーモニカで、感を頼りにひいたり吹いた

りできる。ところが、知的な勉強となると、自分の名まえを書くのが精いっぱい。二十までの数は順々に数え上げることはできても、それが「いくつなのか」という数のはあくになると、いくら聞いてもニヤニヤしているだけ。しまいには、覚えさせようと力むわたしのようすがおかしいと、声をあげて笑うのだった。

四年生の悟は、手先の仕事に鈍い子どもたちの中で、絵や工作がとくいで、いつもわたしを驚かせるような作品をつくり上げる。だが数になると、しどろもどろ、六に一を加えることさえ、両手を使って数え上げていた。

マキ子は七人の中の最高学年で、身の回りや教室の整頓、用事などをさせると、子どもとも思えぬほど手落ちがなかった。ところが算数の学力は三年生程度。絵になると、二年生の公子と変わらぬ幼稚さであった。

いつも、ぬらりくらりとしているシゲ子。未熟児として生まれ、母親が死亡してからは父と別れ、祖父母に育てられているか細い感じの加代子。双生児のひとつとして難産の末生まれたクニ子は、屈託のない明るい性格だが、からだの発育が遅れている。

そうした子どもたちの中で、朋子は、ことに手先が無器用で、ことごとに、子どもたちから注意を受けたり、手伝ってもらったりしていた。一般に手先が無器用で、正確さと早さに期待の持てぬ子どもたちであったが、とりわけ朋子の仕事ぶりは、「無器用な」というより、未熟な幼児の仕事の思わせた。「無器用」とは、わざはつたないが、ともかくも仕事ができる状態にある。